

第1章

はじめに

1.1 調査にいたるまでの経緯

トウキョウサンショウウオは、雑木林と隣接する水辺を行き来して生活することから、東京都西部では里山の良好な自然環境を象徴する存在として知られてきた。しかし、その生態や分布については不明な部分も多かった。

長年にわたり本種の生態と分布を調べてきた八王子市の中学校教諭・金井郁夫氏による調査結果が、1979年に環境庁(当時)の「第2回自然環境保全基礎調査・動物分布調査報告書」[26]として発表されたことで、ようやく都内全域の生息状況が総合的に把握できるようになったが、同時に都内の生息地の多くが危機的状況にあることを認識させることになったのは皮肉である。

その後、都内の丘陵部の環境破壊はさらに進み、多くの生息地が消滅していったが、その状況を把握するための総合的調査は20年近くも行なわれて来なかった。

しかし一方では、「川口の自然を守る会」、「丘陵のトウキョウサンショウウオを守る会」、「トウキョウサンショウウオを守る由木の会」、「西多摩自然フォーラム」など、金井郁夫氏に活動を支えられた多くの市民団体により、各地で調査が続けられていた。

1998年、環境庁(当時)の「種の多様性調査」の一環として、東京都によって20年ぶりに都内のトウキョウサンショウウオの調査が行なわれた。この調査は、前述の都内各地の団体とともに「トウキョウサンショウウオ・ネットワーク」を結成して、調査や保全のための情報交換を行なってきた「西多摩自然フォーラム」が窓口となり、各団体や一般市民にも幅広く呼びかけて行なわれた画期的なものと言えるだろう。

5団体とのべ150名以上の一般市民が参加した「トウキョウサンショウウオ探検隊」によって、2ヶ月にわたって行われた調査では、247箇所の産卵場、8,631個の卵嚢を確認することができ*1(表4.1、21ページ参照)、このデータをもとに東京都立大学(当時)理学部生物学教室で解析が行なわれた。その成果は翌年発行された「トウキョウサンショウウオは生き残れるか? ~東京都多摩地区における生息状況調査報告書~」[60]としてまとめられ、以下のような点が明らかになった。

1. 開発や産卵環境の悪化により、1979年の調査当時約150km²あった都内の生息域の面積が、約100km²にまで減少している。
2. 一箇所あたりの産卵卵嚢数が減少していることから、個体群のサイズが小さくなる傾向にあると推定される。
3. 個体群動態モデルのシミュレーションにより、今後50年で個体群の集団が1/4程度にまで減少すると予測される。

この結果を踏まえて、「トウキョウサンショウウオ探検隊」では、今後の生息状況が長期間にわたってどのように変化していくかを把握することの重要性を痛感し、活動を継続するため新たに「トウキョウサンショウウオ研究会」を組織した。

研究会では、各団体が定めた産卵場で卵嚢数や生息・繁殖環境などの経年変化を観察すると同時に、10年ごとに都

*1 1999年の調査データも追加して文献[60]の数値を修正した。

内全域での一斉調査を行ない、状況の変化をいち早く把握して保全対策のために役立てることが確認された。また、これと平行して各地の研究者・団体・市民との情報交換や一般に対する普及啓蒙のためのシンポジウムも毎年開催し、2021年は新型コロナウイルスの感染拡大の影響で初めて開催を中止することになったが、2020年には22回目のシンポジウムを開催することができた (<http://salamander.la.coocan.jp/salamander/prog22.htm>)。毎回100名を超える参加者が集まり盛況な会となっている。

2006年に行なわれた環境省によるレッドデータブックの改訂では、トウキョウサンショウウオについての前述の調査結果ならびに各地のデータに基づいてカテゴリーの見直しが行なわれ、それまで「保護に留意すべき地域個体群(東京都)」だったものが、全国的により危機的状況である「絶滅危惧II類」とされるに至った[31]。

2018年は1998年の調査から20年目に当たり、前回・前々回に確認した産卵場を中心に、再び都内の3度目の一斉調査を行うことができた。現在までに都内9市2町で444箇所の産卵場を調査し、2018年の一斉調査では261箇所で6,222卵囊を確認することが出来た(第4章参照)。今回の調査は2~5月にわたって行なわれ、前回同様初回と異なり、積極的には一般市民への参加を呼びかけず、公開された形で調査を行う地域も一部にとどめ、経験豊富な研究会のメンバーが各地域の調査担当代表者となり多摩地区全域で幅広く生息情報を集めた。

1.2 謝辞

今回のトウキョウサンショウウオの生息調査では、多方面にわたり多数の方々に協力して頂いた。第2章のトウキョウサンショウウオの生態に関する知見の多くは、日の出町羽生での46年間に及ぶ野外調査の結果に負うところが大きい。羽生での調査では、故人である羽生傳吉・ミネご夫妻及びご家族の訓男・幸子ご夫妻に長年に渡る様々な援助を頂いた。ここに深く感謝申し上げる。第4章の結果のまとめにあたっては、第5章で各地域の調査分担代表者が挙げられた情報提供者及び調査協力者以外にも多くの方々に生息情報収集に関してお世話になった。特に田畑伊織氏・戸田光彦氏・杉村健一氏・坂本有加氏・桜井朋広氏・黒須詩子氏・古橋保志氏には貴重な情報を頂いた。皆様に深く感謝したい。なお、本報告書の印刷にあたり、公益財団法人日野自動車グリーンファンド(2021年度)の助成を受けた。謝意を表したい。